

淀江和傘伝承館

日本の伝統的な日傘である「傘」は、油を塗った和紙を細い竹の骨に張って作られます。淀江の海辺の集落には、1821年から数十人の傘職人が集まり、「淀江傘」と呼ばれる独特のスタイルを確立しました。20世紀初頭には、年間17万本の傘を生産し、全国に販売するまでになりました。現在も2店の生産者があり、手作業で傘を製作しています。和傘伝承館は、この色鮮やかでドラマチックな傘の歴史とデザインを紹介する博物館です。隣接して現存する最大規模の傘工房を運営する「淀江和傘伝承館」が運営しています。現在でも直径1メートルほどのものから、直径2メートル以上ものに至るまでの丈夫な淀江傘を作っています。後者の大きい方の傘は野点傘と呼ばれ、屋外での茶会に使われます。この工房で精巧に作られた淀江傘はコレクターアイテムとなっており、歌舞伎界を代表する俳優や茶道会を代表する茶道家が熱心に収集しており、日本の皇族からの賞賛も得ています。

竹と紙を使った丹念な作業

淀江傘を作るには、骨と持ち手のそれぞれの部分用に専用の種類の竹が必要となります。1本の傘には100本以上の細い骨が必要で、その形を作るのは大変な作業です。以前はこの作業は手で扱う道具のみで行われていましたが、工房では100年前の機械を使って、竹を素早く正確に割っています。多くのデザインでは骨は自然の色のままですが、染めることもできます。糸飾りという色鮮やかな絹糸が、傘の内側に丁寧に織り込まれ、骨をつないで張力を保ちます。こうした色の組み合わせが、この様式の特徴の1つとなっています。

印象的な伝統デザイン

次に、手漉きの和紙を、わらび粉というシダ類から作った天然のネバネバした接着剤で骨に貼り付けます。この和紙に亜麻仁油などの油を混ぜて防水加工を施します。最後に、和紙に亜麻仁油とその他の油を混ぜ合わせたものを染み込ませて、防水加工をします。時が経つと、油を染み込ませた和紙は、元々の白い色から暖かい金色に変化していきます。祭りやその他の特別な機会のために作られた淀江傘には黒い墨で書道のような文字の装飾が施されることがありますが、ほとんどの場合は色紙を切って貼り付けることで、目をみはるような幾何学模様が作られます。典型的な模様には、縁を巡るように黒を配した簡素なもの、大きな縞模様のもの、そして六角形のものがあります。最も人気のデザインの1つに蛇目があります。中心付近に小さく明るい色の輪っかの模様があり、蛇の目を模したものと考えられています。梅の花を模した大きな波打つ輪っかのモチーフは縁起の良いデザインと考えられており、伝統的な結婚式でしばしば使われます。数十年前には、淀江で作られた油を染み込ませたばかりの傘

が、近くの浜辺で持ち手を砂に埋めて太陽の方向を向くようにして乾かされていました。巨大な花のように数千もの淀江傘が浜辺を覆い尽くした風景は目をみはるものでした。